

# ドイツにおける博士号取得の回顧と展望

森田 直子

1. ドイツにおける博士号取得 Promotion
2. „to be, or not to be, that is the question...”
3. アカデミズムへのとば口にて

本誌 16 号に「ビーレフェルトの一冬 (2001-2002 年)」と題し、ドイツ留学の体験記を書かせてもらった。その際、博士論文をどこでどう完成させるのか、という具体的な問題は意識的に棚上げしていた。結局、「長い灰色の単調な」北西ドイツの冬をさらに 4 度経た 2006 年 6 月、ビーレフェルト大学 歴史学・哲学・神学部で博士号取得 Promotion を終えた。この間を振り返る機会を与えられた本稿では、まず、ドイツの大学における博士号取得のあり方について簡単に紹介する。つぎに、ドイツ語による論文執筆開始前、執筆中、執筆後と、少しずつ変化をしながらも不断に存在した、「歴史学の博士論文を外国語で執筆すること」についての心理的葛藤を取り上げる。この個人的な煩悶は、海外で博士号を取得するのに伴う諸問題の一つとして、ある程度、客観的に捉えうるだろう。最後に、ドイツにおける博士号取得を、日本およびドイツのアカデミズムと関連させて独自に総括する。

## 1. ドイツにおける博士号取得 Promotion

ドイツ語圏の大学における博士号取得のあり方は、英米の大学での博士号取得のステレオ・タイプの対極に位置するように思われる。英米の大学という風に一括りにするのは乱暴に過ぎるかもしれないが、博士号取得までの道のりがかなりシステムティックであるというイメージが強い。アメリカでは、博士課程の最初の 1-2 年で語学試験等に合格し、厳しいコース・ワークの単位を取ることで、博士論文執筆の資格と技術を得、イギリスでは、きめ細やかなテュートリアルに基づき論文を執筆していく、というものである。他方、ドイツ語圏の大学では、伝統的には博士課程という制度的な枠組が存在しない。各大学や学部が定める博士号取得の規定 Promotionsordnung では、博士論文提出時に、高校卒業試験 Abitur の成績証明や、大学で履修した単位・成績等の提示を義務づけているが、ごく一般的な経緯で博士号取得を目指すに至った者にとって、これは事務手続きの一つである。「博士論文執筆に足かけ 8 年費やしたが、その間に指導教官ときちんと話したのは最初と最後の 2 回のみ、あとは道端でぼったり出くわして雑談しただけ、それでも博士号は取れた」と、誇張気味に話してくれたドイツ人知人もいる。かなり無秩序でいい加減にも聞こえるこうした事態は、実験を共同で行う研究分野や、教官から具体的な課題を与えられる学問領域では起こり得ないかもしれないが、知人の専門であるドイツ語・ドイツ文学や、私の専門の歴史学では決して想像不可能ではない。

極端な言い方をすれば、ドイツ語圏の大学では、良い論文を書きさえすれば博士号が取得できるのである。その背後には、学士 (BA)・修士 (MA) という課程システムをとらないできたドイツの大学制度だけでなく、それを支える学問的姿勢や理想が見え隠れしている。つまり、語学力・思考力・分析力などは履修単位数や優の数で客観的に示せずともよい、優れ

た論文そのものがそれらを前提としているのだから、というわけである。単位や資格といった目に見える踏み台がないことは、自分に適合するタイミングやレベルで博士号取得へとジャンプできることを意味し、独自性や学問的な自由の確保という点で有利である。しかし、外圧が少なければ、様々な口実で論文の完成が先延べされるのが常となる。ドイツのある統計によれば、博士論文完成には平均5年かかり、博士号取得時の平均年齢は30歳という<sup>1</sup>。この数字は、現在ドイツの大学で教鞭を執るいわばエリートたち、しかも、総じて短期間で博士号取得に至る自然科学系（工学系を除く）の教官を含めた平均値である。私の身の回りでは、博士論文に取り掛かってから平均5-6年を過ごし、33歳前後で博士号取得というケースが一番多かったように思う。したがって、8年かけて博士号を取得したという上記の知人も、その間に出産も経ており、前代未聞の長丁場だったわけではない。

以上のことから、英米の大学では、比較的短期間で博士号が取得できるよう制度的に保証されているのに対し、ドイツ語圏の大学における博士号取得は、時間を自由に使い、浩瀚かつ専門性の高い博士論文を完成させるのにより適している、という対比イメージが浮かんでくる。強調しておきたいのは、これは伝統から導かれるスタティックな一般像であり、是非や何らかの優劣を示唆するものではない。博士号取得の形式でもって、それを行う国および大学を選ぶ人がごく例外的であるのと同様に、優れた——あるいはその逆の——論文や研究者は、博士号取得の制度的あり方にかかわらず存在する。

とはいえ、学位取得のシステムは、とりわけ留学生にとって重要である。上述のように、ドイツ語圏の大学では博士課程というものがいないため、博士号を取得したい場合、まずは、博士号を出す資格のある指導教官を探すことが第一歩となる。「A大学の博士課程に入学したので、指導教官は自分のテーマに一番近い専門のB先生にお願いする」、とか、「C大学で博士号を取った」というのが日本風の発想だとすると、大学と指導教官の位置が入れ替わったのがドイツ風になる。したがって、ドイツでは、指導教官が他の大学に移籍すると門下生もついて行くことが多く、博士論文の完成前に指導教官が退官しても、通常はその教官が名実ともに指導教官であり続ける。つまり、大学に対して教官の力が強い分、博士号取得においても指導教官の持つ重みが大きいのである。当然、教官側も、指導を引き受けるかどうかは慎重で、受け入れてもらえなかった例や、途中で指導教官を変更する例も少なくない。「苦い経験をしたから外国人は受け入れない」と半ば公言している教官もいれば、ドイツ人学生でさえ「あの先生は気難しくて嫌だ」と噂する教官もいる。それでなくても文化や言語の壁に突き当たる留学生にとって、指導教官の選択は、博士号取得の成否にも影響するきわめて重要なこととなる。ちなみに、ドイツ語圏のこうした事情を良く表しているのがDoktorvater/-mutterという呼称ではないかと思う。博士号取得までは、指導教官のことを担当者・世話人といった意味合いのBetreuer/Betreuerinと表現したりするが、博士号取得後は、「博士号の父（もしくは母）」と呼ぶ。そこには、日本語の「恩師」よりも強く複雑な感情がこもっているような気がしてならない。

指導教官が決まれば、博士号取得までのプロセスはかなり自由であることは既に述べた。人文社会学系の諸分野では、実際に論文の執筆に取りかかるまでは、史料を集めたり、関連文献を読んだり、それをまとめて指導教官のゼミや同じように博士号取得を目指している者

<sup>1</sup> [http://www.mentoring.uzh.ch/literatur/wika\\_broschuere.pdf](http://www.mentoring.uzh.ch/literatur/wika_broschuere.pdf), S. 10.

たちの前で報告したり、ということが中心的営みであり、執筆を開始したら、一章ごとに指導教官に提出してコメントをもらう、というのが大凡のパターンようだ。この期間、大半の者は、指導教官が率いる研究プロジェクト、あるいは各大学やドイツ版学術振興会 (DFG) が組織する一種の奨学金プログラム Graduierten Kolleg に属しているため、大学内での身分(と同時に経済的基盤)は確保されている。留学生は、この点でやや不利である。ドイツ学術交流会 (DAAD) の奨学金を得られれば、色々な面で優遇されるが、大学における所属身分を明確にしておくに越したことはない。その際、一般学生 Student として登録するか、博士号取得を目指す学生 Doktorand として登録するかの選択になろうが、前者はドイツ語の語学試験 (DSH) に合格すれば、さしたる問題なく可能で、後者は、各学部で資格審査をしてもらう必要がある。日本の大学で修士号を取っていれば (そして、それまでの履修科目や成績が英文または独文で用意されてあれば)、これもさほど困難ではない。歴史学の Doktorand はラテン語の資格を持っているべしといった分野特有の規定は、研究に必要なならば試験を受けて資格を取ればよいだけのことであり、あまり必要でない場合は、高校で履修した古文・漢文の単位で代替してもらったり、指導教官に一筆書いてもらうなどの抜け道がある。

博士論文の審査では、副査を務める教官の選択も重要となる。なぜなら、指導教官と並んで副査が論文を読み、所見 Gutachten を書き、成績をつけることになるからである (ただし、成績は二者の合意のもとに出される)。指導教官の力は絶大で、副査の所見次第で成績が覆るようなことは基本的にはないと言えるが、論文に対して客観的な意見を聞けるに越したことはなく、論文執筆中から副査となる教官にも積極的に指導を仰ぐ人が多い。所見と成績が出揃ったら、約3週間の準備期間で口頭試験に備えることになる。口頭試験の形式は二通りあり、博士論文のテーマとは別のテーマについて改めて準備し、文字通り厳しい口述試験である Rigorosum なのか、博士論文を弁明するかたちの試験 Disputation なのかが、Promotionsordnung に規定されている。傾向としては、前者は廃れつつあるようだ。ビーレフェルト大学歴史学部の Disputation は、主査である指導教官、副査、試験官、学部長 (大抵の場合はその代理人) および記録を取る人物の5人から成る委員会によって組織され、受験者が特に願わない限りは学部内公開である。試験時間は90分、最初の15分で受験者が論文を紹介し、その後は延々と質疑応答が続く。ただし、受験者は、主査、副査の所見文書を事前に読んでいたため、思わぬ質問や批判に途方に暮れるということは起こりにくく、どれだけ説得的に批判をかわせるか、自説を防衛できるかが焦点となる。普段は物静かな印象の小柄なドイツ人女性が、彼女の副査であった大物歴史家ユルゲン・コッカに対して、顔を真っ赤にしながら反論していた姿には、驚くと同時に、これがまさに防衛 Verteidigung なのだ<sup>2</sup>、と納得したものだ。口頭試問についても、論文とは別個に成績がつけられ、両者の総合成績が博士論文の評価となる。結果が不合格でなければ、この段階で仮の博士号が与えられ、博士号取得の過程が終わったも同然なため、大半の人は盛大な祝賀パーティーを開く。しかし、制度上、正式に博士 Dr. を名乗るためには、博士論文を公表しなければならない。公表の仕方は、大学図書館を通じてインターネット上に公表する方法、論文のコピーを規定部数 (ビーレフェルト大学歴史学部の規定では60部) 図書館に提出する方法、そして、出版社と契約して出版してもらう方法がある。人文社会系では、やはり最後の方法を望む人が多いが、金

<sup>2</sup> Disputation のことを、口語では Verteidigung とも言う。

銭的には最も負担がかかり、論文の成績も関係する。最高の成績を得た上で、指導教官のコネと推薦があれば、有力な出版社や有名な叢書の中で出版することが可能となり、出版助成金なども得やすくなるからである。いずれにせよ、口頭試問から一年以内に論文の公表（出版社を通じた公表の場合は、契約書への署名）を終えると、制度的な博士号取得の全過程の無事終了となる<sup>3</sup>。

## 2. „to be, or not to be, that is the question...”

誰が考え出したのか、「博士号は足の裏についたご飯粒のようなもので、取らないと気持ち悪いが、取っても食えない」云々と言うそうだ。美しい比喻ではないが、博士号そのものの意味を相対化するという点では悪くない例えである。博士号という学位は、博士論文を書いた結果として与えられるもので、良い論文を書こうと必死に奔走すれば、知らないうちにご飯粒を踏んでしまう、という風にここでは解釈することにしたい。

ところで、良い論文を書くには、良い研究環境が必要である。ドイツは、ドイツ史はもとより、ドイツ語・ドイツ文学、その他ドイツに関わる人文社会系の学問分野を専門とする者にとって、非常に良い研究環境を提供してくれる。確かに、日本にいなながらも、ドイツ語文献や、重要な文字・図像史料は、デジタル化とインターネットの普及により、以前とは比較にならない容易さと素早さで入手できるようになった。しかし、地方史の雑誌、文書館の手書き史料、古い時代の文献などの閲覧や入手における効率の日独差が、近い将来、完全になくなるとは思えない。また、年月を経て紙がボロボロになった文書を実際に手に取り、それを書いた人間を想像し、その人間と自分との間に横たわる時空を感じ取る一瞬の感慨のようなものは、直接は何の役にも立たないが、それを知らない偉大な歴史家は存在しないのではないか。いずれにせよ、自分の研究対象を直接間接に取り巻く環境を、実際に自分の目で見てみることは、良い博士論文を書くために決して無駄にはならない。

加えて、ドイツ語圏の大学は、一定の経済的保証と良き指導教官という前提条件さえ満たせば、広範な自由の中で博士論文を書くことを可能にしてくれる。指導教官選びは、事前に何人もの教官に面会するわけにもいかず失敗が恐れられるかもしれないが、いざとなれば変えれば良いだけである。もちろん、感情面からしても、指導教官の中途変更は容易なことではないけれど、決して不可能なことでも、珍しいことでもない。また、前出の DAAD は、世界でも屈指の優れた奨学金制度で、ドイツで博士号取得を目指す外国人留学生の多くが恩恵を受けている。日本人の場合は、日本国内での選抜が分野によっては非常に厳しく、基本的には日本国内からしか応募ができないため、DAAD 奨学金が欲しくても得られないこともあるだろうが、ドイツには他にも優れた奨学金制度がある。例え私費での滞在となっても、授業料の徴収がなく<sup>4</sup>、一部の大都市を除き生活費一般が比較的安いため、経済的な面でも日本で博士号取得を目指すのと大差ない。

もっとも、言うまでもなく、良い研究環境は良い論文のための必要条件であっても、十分条件ではない。むしろ、一定の時間がかかる博士論文を外国において完成させるには、その他の条件が予想以上に重要となってくる。モチベーションをいかに維持するか。異なった生

<sup>3</sup> 2007年4月現在、出版社との契約を終えた段階の私は、ドイツ風に称すならば Dr. des. Morita となる。

<sup>4</sup> 後述 三を参照。

活環境において、どれだけ心身相互の健康を保てるか。家族や本人の個人的な問題にどう対応するか。外国語（言語）の問題、等々である。これらの条件は密接に関連し合っており、どれか一つに躓いただけで、せつかくの良い研究環境を生かせない結果にも至りうる。以下では、ドイツでの博士号取得の全過程において、私がもっとも深刻に考え込まざるを得なかった言葉の問題を手がかりに、外国における学位取得について考えることにしたい。

海外に留学した当初の言葉の苦勞というのは、バイリンガルでもない限り日本人の誰もが味わうものである。「コンピュータ・センターに登録に行き、英語がわかる人を連れてきなさいと冷たくあしらわれたことなど、日常生活の悲哀は、数え上げればきりが無い」、のはどこの国であろうと大差ない。また、「…教室に入って『ハロー』と挨拶して、ずっと目をそらされたときはショックだった。…いったいこの東洋人はここに何をしに来ているのだろうという冷たい視線のなかで授業に参加し、一人で寮の部屋に戻っていく」、という状況も、欧米に留学したら誰もが必ず直面するものであろう。欧米文化圏では、話し方が下手であろうが、内容が繰り返してであろうが、とにかく発言をして自己主張しない限り、無視されても仕方がないところがある。それを身をもって理解するまで、大学も居心地の良いところではない。しかし、極めつけは、指導教官等と面と向かって話そうという時の言語能力不足である。授業中に教授に質問され、質問が聞き取れずに3度も繰り返してもらった後、「わかりましたか」と聞かれて思わず「はい」と答えてしまい、答えを待つ教授を前に、「一分がすぎ、二分がすぎ、三分がすぎる。おそろべき沈黙が支配し、…しだいに私の意識は遠のいていった。(中略)このまま意識を失うかもしれない、と思ったとき、私は答えていた。「すみません。わかりません。」この描写は、私たちの大先輩であり、現在、西洋史研究室の教授である高山博先生によるものであるが、私は不遜にも自分が当人であったかのような錯覚に陥る<sup>5</sup>。

念のために補足しておくが、私は当該外国語のコミュニケーション能力に特別な問題を抱えていたわけではない。留学前に2度、ドイツのゲーテ・インスティテュート（ドイツ語学校）の短期講習を受けて統一中級試験に合格していたし、東京のゲーテ・インスティテュートにも真面目に通った。また、DAADは、奨学生のドイツ語力が留學生活に不十分であると判断すると、正規の留学前にドイツ国内でドイツ語講習を受けられるよう追加の奨学金を出す、そのお世話にもならなかった。にもかかわらず、上記の有様である。そんな状態で博士論文執筆などを口にして良いものか、他人はもとより、自分も首を傾げざるを得ない。

ところが、幸か不幸か、コミュニケーションにおける当初の問題は、それに打ちひしがれて自分の殻に完全に閉じこもったりしなければ、予想以上のスピードで確実に改善されていく。自分の生活圏や行動パターンが確立するのに伴い、新しい恥をかく機会は減り、教授その他、自分の身の回りにいるドイツ人たちとも何度か接触するうち、彼らの話し方の癖や特徴に慣れ、質問そのものが全く聞き取れず、理解できないという場面が少なくなるからである。しかし、これまた当然のことながら、ドイツ語の日常会話が多少上達したところで、ドイツ語による論文執筆が容易になるわけでは全くない。そもそも、外国語で学術論文など書けるのであろうか。私は、ドイツ語で博士論文を書くことと決心して渡独したわけではないため、まずはこの問題と向き合うことになった。そして、「書ける」という答えは、かなり早いうちに出た。その気になって見回すと、ドイツ語が母語ではないながら、ドイツ語で学術論文を

<sup>5</sup> 引用は、高山博『ハード・アカデミズムの時代』（講談社 1998年）、45-46, 58頁より。

書く人は予想以上に多かった。その大半は、Diplom-/Magisterarbeit（日本の修士論文に相当）であるが、外国人のドイツ語論文を校正する仕事とそのマーケットも確立している。もちろん、外国語としてのドイツ語で学術論文を書く人々の動機、能力、結果は非常に多様だが、少なくとも「書けない」と答えるのは意気地のない言い訳であることが分かった。

さて、ドイツ語で学術論文を「書ける」＝「書く、書かねばならない」、という等式は成立しない。とりわけ、歴史研究の学術論文を外国語で書くか否かという問いは、第一の問いとは異なり、なかなか答えが見つからなかった。誤解を恐れずに言えば、歴史学は言語に二重に縛られている。歴史研究の核である史・資料の大部分は、一つまたは複数の文字言語で書かれたものであり、歴史家はまずそれを正確に読み解く能力を持っていなければならない。と同時に、特定の言語を用いて、その解釈を理路整然と提示せねばならない。歴史学が科学である以上、研究論文の文章が上手いか、文学的に美しいかということは、研究の本質には関係ないはずである。しかし、史料の選択や論証という科学的手続きが、まずはその文章を通じて伝達され、判断されるため、文章は読みやすいに越したことはない。その点で、通常、母語は外国語に比べて有利である。歴史学における名著とされる研究で、母語以外で書かれたものはどれほどあるだろうか？こうした考量ののち、賢明な人ほど、「外国語で学術論文を書けるが、歴史学の研究論文は外国語では書かない」、という結論に至るのかもしれない。それに対しては、「書かなければ、書けないのと同じだ」という反論があるのだけれども。

歴史学の博士論文をドイツ語で書くか否か、すぐには答えを出しかねたもう一つの理由は、書いてみたい、という自分の単純な冒険心と、そうした試みには否定的な日本人の識者たちの意見とのあいだの闘い合いにあった。否定的な意見とは、凡そ次のようなものである。日本の大学では、人文系における外国の博士号の評価が定まっておらず、就職に有利にはならない、日本語で博士論文を書いて発表する方がむしろ堅実である、云々。こうした意見は正当であるだけに、また、私自身、大学に就職することで将来も細々と研究を続けていきたいという願いを抱いているだけに、簡単には無視できなかつた。「ドイツ語で論文を書きたいのなら、（日本で）博士号を取ってからだって遅くない」、という助言は、私の悩みを巧妙に解決してくれたかのように見えた。しかし、最終的に、私はドイツ語で博士論文を書くことを決心した。決定的な理由があつてこの答えに至つたというより、これだけ「書く」方に不利な要素が多いことが分かつていながら、「書かない」と決断できないからには書いてみるしかないのか、という消去法にも近かつた。留学を受け入れてくれたウーテ・フレーヴェルト先生に、「ドイツ語で書きます」と伝えたら、もう後には引けなかつた。渡独してから2年近く経ってからの決意表明に、先生もその間の私の心の葛藤を察して下さつたのであろう、その年のクリスマスだったか、「ドイツ語で博士論文を書くというあなたの決断に私は感銘を受けました。鼓舞と激励のために」というコメントとともに、「外国人」ドイツ語作家エリアス・カネッティの自伝小説を贈って下さつた。

論文執筆中は、決断を下すまでの懊悩が時間の無駄であつたと思えるほど、言語そのものをめぐって特別の問題を感じることはなかつた。苦勞しなかつたということではなく、ドイツ語で書くこと自体、学位論文執筆に内在する諸困難の一つとして認識され得た、という意味においてである。しかし、自分の論文をいわゆるネイティブ・チェックに出したとき、一度は切り抜けたはずの言葉の問題に、再度、向き合わざるを得なかつた。私は、自分の論文の限界は自認していたが、とにかく自分の力で書き上げたという満足感があつた。それが、

チェックを通じて消滅してしまったのだ。単純な文法上のミスが多くて愕然としたからではない。この点について言えば、むしろ、自慢したくなるほど訂正は少なかった。表現が稚拙だったり、不適切だったりする箇所が多くて呆れたからでもない。そういう具体的なことでなく、文章全体が自分の力の支配下にないことが露呈したからである。「この部分は、何を言いたいのか分からない。前後の文脈から判断するに、〇〇と言いたいようであるが、ならば、なぜそう書かないのか」、とチェックされる。自分では、まさに〇〇ということ表現したつもりだったのに！あるいは、「△△（私の書いた表現）とも言えるけど、××と言った方が良い」と直される。なぜ良いのか、「うまく説明は出来ないけど、多分、ほとんどのドイツ人ならこう言うと思う」そうだが、私にはその違いがよく分からない！悔しい哉、悲しい哉、結局、その訂正なり提案なりを受け入れざるを得ない。こうしたことが重なると、自分の文章に対する無力感が高まり、自らの決断への後悔、論文そのものの価値が否定されたような敗北感、ついには、「外国史」研究の本質的価値に対する疑念などが強まり、論文を廃棄処分してしまえという悪魔の声すら聞こえる。どうしたものかと悶々とする日々は、論文の提出期限が外部の力で設けられなければ、半永久的に続くようにも思われた。

このような煩悶を理性でもって相対化するのは困難ではない。母語である日本語でも、誤解のない読みやすい文章で論文を書くことは決して容易でなく、チェックを頼めば、いくらでも難点を指摘され、直される。内容がきちんとしていれば、表現のまずさなどを気にすることはない。言葉の問題などに拘泥せず、歴史学の醍醐味を味わうべし、等々。そうした相対化がうまくいかず、私の場合は、言語に起因する——あるいは、それを言い訳にした——問題に苦しめざるを得なかったのは、個人的性格に加え、外国で博士号取得を目指すこと自体が安易でないことを示しているのだろう。確かに、ドイツ語という外国語で歴史研究の博士論文を書いてみたい、という無邪気な願望を叶えることができた点で私は果報者であった。その上、論文および口頭試問に対して、フレーヴェルト先生から私の身に余る評価を頂戴した。それでも、そもそもの出発点である「良い論文」を書くという意味で、私の決断は一つの試みにしか過ぎなかったということは、認めざるを得ない。外国史研究を行う際、現地滞在という良い環境を生かすも殺すも本人次第であり、各々が自分に見合った道を選択すべきであろう。

### 3. アカデミズムへのとば口にて

ここ数年、日本では、国公立大学の独立行政法人化を嚆矢とする様々な変革がアカデミズムを襲った。ドイツでも、高等教育機関とりわけ大学が、大きな変革の波にさらされている。その第一は、BA・MA 制度への移行である。かつては、最初の学位となる Diplom/ Magister 取得まで通常5年から6年かかったところ、新制度移行後は基本的に3年で学士の学位を取得して卒業（か、単位不足で留年か退学か）ということになる。その後、希望すれば1年か2年の修士課程が続く。これにより、少なくとも博士論文に取り掛かる年齢は確実に引き下げられるだろうし、システムティックな学位取得が広まることで、ドイツの大学に博士課程が誕生する日も近いかもしれない。ドイツの大学におけるもう一つの変革は、学費の導入である。逆に言えば、これまで、ドイツの高等教育は無償であった（ただし、学籍登録をして特典の多い学生証を得る場合は、学期毎に一定の登録料を支払う）。ビーレフェルト大学は、私が在籍していた2006年夏までは毎学期150ユーロ前後（過去6年間にほぼ倍増！）の登録

料をとるだけだったが、2006年秋の入学生から毎学期500ユーロ（約80,000円）の学費徴収を開始した。日本の大学の学費に比べれば大したことはないが、ドイツでは500ユーロの価値はかなり高く、0が500になったこと、そして何よりも学問をするためにお金を払わねばならない、という考えそのものに対する抵抗は大きかった。詳しく立ち入る余裕はないが、ビーレフェルト大学でも、学長の自家用車が放火されたり、書籍を「首つり」にして「学問の死」の危機感をアピールしたり、かなり過激な反対運動が展開された。

これらの変革は、様々な要因の複合的結果であるが、大学やアカデミズムの国際化への対応もその重要な契機である。渡独後すぐにビーレフェルト大学でDSHを受験した際、試験会場を埋める200人近い外国人にいささか驚いたが、大学に在籍している学生の一割近くの1,700人前後が外国人留学生で、その数は年々増える傾向にある、と聞いて納得した。彼らの多くは、旧ソ連地域やポーランド、中国などから実学を修めに来る学生だが、文学や教育学で立派な論文を書く外国人もいた。良くも悪くも、留学生とともに、お金と知が移動する。ビーレフェルト大学も、英語によるガイダンスや授業を増やし、留学生には学費が実質的には無料になるような奨学金制度を設け、何よりも優れた研究者を教官として迎え、充実したプログラムを提供しようと力を注いでいる。教官側も、より魅力的なオファーをする大学へ容赦なく移籍するケースが多くなってきたようだ。

こうした英語中心主義やお金がモノをいう傾向に対しては、反発もありうれば、一時的な揺り戻しも見られるかもしれない。しかし、より良い環境を求めて、学生や教師が国境を越えて移動し、大学の国際的な競争が高まる一般的な趨勢は、今後も変わらないだろう。それへの対応という点で、日本の大学は、ドイツの後塵を拝しているように思われる。それでも、意識して見れば、アメリカ、ドイツ、イギリス、フランス等と日本とを股にかけ、研究成果を日本国内だけではなく海外へも発信する文系の研究者も少なくない。ドイツ留学を通じ、私は遅まきながらも周囲のこうした状況を認識できるようになった。また、心理的な葛藤の末、ともかくも外国語で学位論文を書いたという事実は、見えない言葉の壁に挑戦し続けることへの抵抗をなくしてくれた。その意味で、私のドイツにおける博士号取得は、アカデミズムの中を歩み進んで行く際の最初の道標なのである。